

### CASE

犬 | マルチース | 12歳 | 避妊済み雌

病歴と主訴……………下腹部に点状出血。元気食欲あり。予防歴や食事に問題はなかった。

身体検査上の異常所見……………下腹部に点状出血

鑑別診断……………血液凝固疾患、皮膚出血を伴う皮膚疾患(腫瘍など)

診断プラン……………スクリーニング検査としてCBC、血液凝固検査、血液化学検査、尿検査を実施。

### プロサイトDx 解釈①

#### 赤血球

赤血球系細胞では、貧血は認められない。また、網赤血球の増加も観察されない。これは赤血球ドットプロットからも確認できる。

#### 白血球

白血球系細胞では、軽度の総白血球増加症が認められる。これは好中球増加症に起因する。血液塗抹評価による白血球百分比は以下の通りとなる。

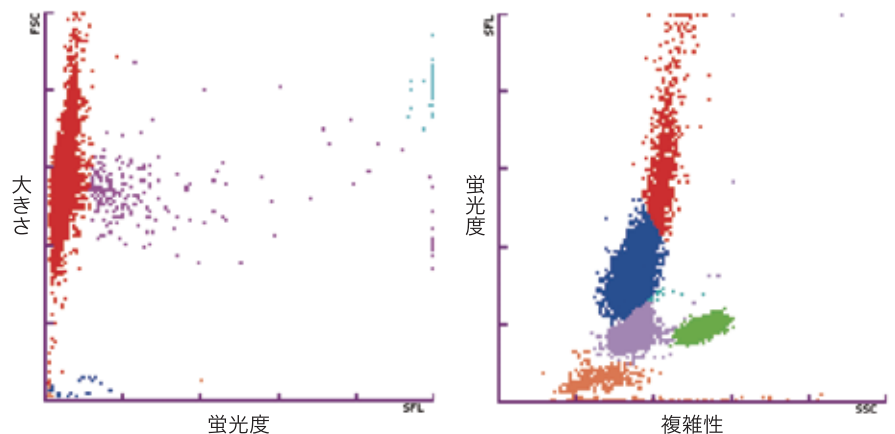
#### 血液塗抹から求められた各血球数

桿状核好中球…………… 0/μL  
 分葉核好中球…………… 8,615/μL  
 リンパ球…………… 2,985/μL  
 単球…………… 1,124/μL  
 好酸球…………… 1,236/μL  
 好塩基球…………… 0/μL

#### 血小板

血小板は、重度に減少している。アスタリスク(\*)が付いており、MPVやPDW、PCTは計測されていない。血小板系細胞ドットプロットでも、血小板が重度に減少していることが分かる。

検査項目	検査結果	基準値	低値	標準	高値
<b>プロサイト Dx</b>					
RBC	7.22 M/μL	5.65 - 8.87			
HCT	49.7 %	37.3 - 61.7			
HGB	16.9 g/dL	13.1 - 20.5			
MCV	68.8 fL	61.6 - 73.5			
MCH	23.4 pg	21.2 - 25.9			
MCHC	34.0 g/dl	32.0 - 37.9			
RDW	19.6 %	13.6 - 21.7			
%RETIC	0.85 %				
RETIC	61.4 K/μL	10.0 - 110.0			
WBC	13.96 K/μL	5.05 - 16.76			
%NEU	59.7 %				
%LYM	21.9 %				
%MONO	7.5 %				
%EOS	10.8 %				
%BASO	0.1 %				
NEU	8.32 K/μL	2.95 - 11.64			
LYM	3.06 K/μL	1.05 - 5.10			
MONO	1.05 K/μL	0.16 - 1.12			
EOS	1.51 K/μL	0.06 - 1.23			高値
BASO	0.02 K/μL	0.00 - 0.10			
PLT	0 K/μL	148 - 484			低値
MPV	----	8.7 - 13.2			
PDW	----	9.1 - 19.4			
PCT	----	0.14 - 0.46			



### 血液塗抹所見

- ・赤血球系細胞では貧血は認められず、多染性赤血球や球状赤血球の出現を含む溶血を示唆する所見は認められない。
- ・白血球系細胞では軽度の好酸球増加症が認められる。好中球には中毒性変化や左方移動は認められない。
- ・血小板は塗抹上でも重度に減少している。極少数の大型血小板が散見される。

### その他の検査所見

血液凝固検査(PT、APTT)：異常は認められなかった。

その他の検査：異常は認められなかった。

### 追加検査

骨髓検査では巨核球系細胞過形成が認められた。ダニ媒介性感染性疾患はPCR検査により除外された。

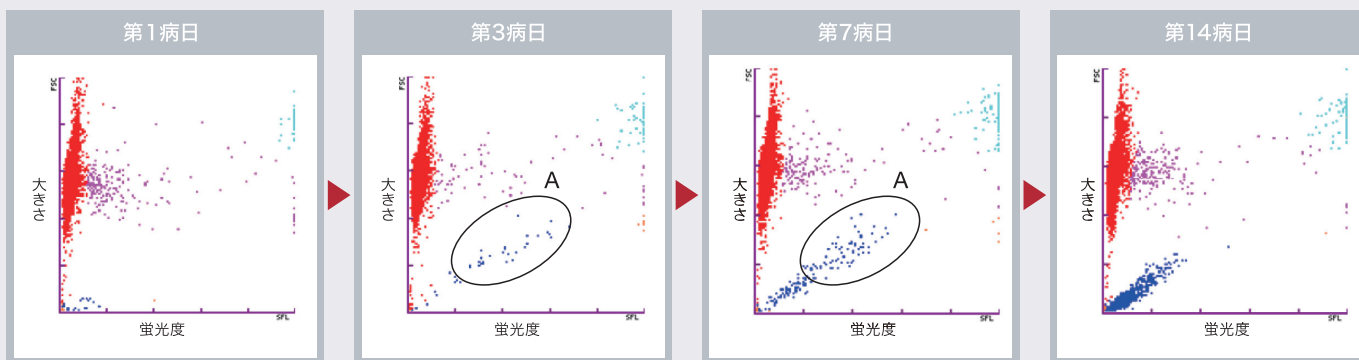
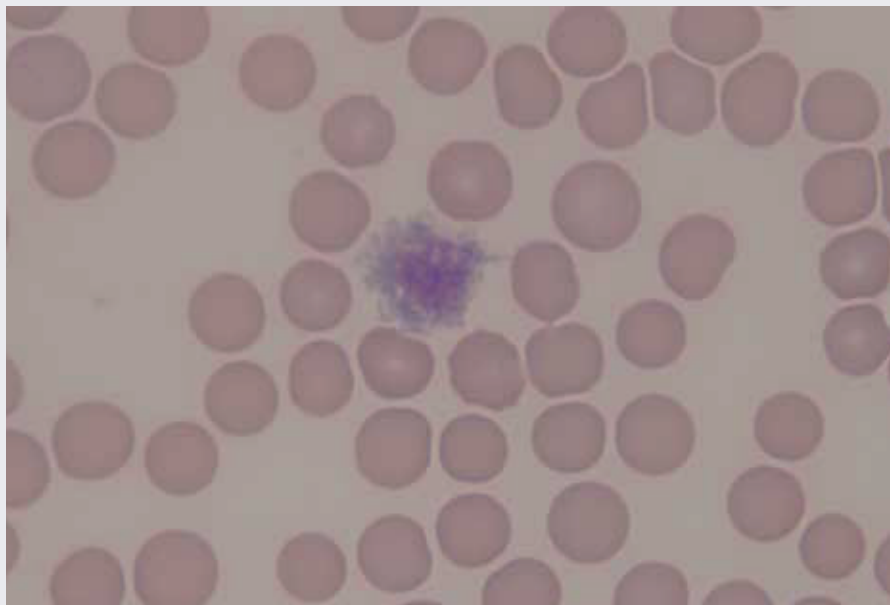
### 診断

免疫介在性血小板減少症

### 治療及びモニタリング

本症例はグルココルチコイドによる免疫抑制療法を行った。治療効果のモニタリングとして血液検査を実施した。

### 経時変化



	第1病日	第3病日	第7病日	第14病日
プロサイトDx 血小板数 (k/ $\mu$ L)	*0	*3	*49	263
血液塗抹 概算血小板数 (k/ $\mu$ L)	1	20	163	286
血液塗抹 大型血小板出現	+	+	++	-

### プロサイトDx 解釈②

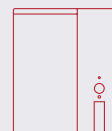
プロサイトDxによる血小板数は、第14病日までそれほど大きな変化は認められない。但し、第3病日より日を追うごとに大型血小板と思われる血小板ドットプロットが中央にプロットされる

ようになっている(A参照)。血液塗抹でも大型血小板の増加が認められ始め、また、塗抹上での血小板概算数は増加傾向を示している。これは免疫抑制療法に反応して、血小板破壊の停止と、骨

髄から大型血小板の放出が起こっていることを示している。第14病日には十分な数の血小板が認められ、その大きさも一定となり、ドットプロット画面左下に集中して存在している。

## 犬の血小板減少症時の評価法

日々の診療に役立つ  
プロサイトDx 解釈のポイント 09



今回の症例では、重度の血小板減少症を示す症例の回復状況を継続的に示した。プロサイトDxでは犬の大型血小板を計測することが困難であるが、ドットプロットによりその存在を確認することが可能である。これらのドットプロット所見と血液塗抹による確認を併せて

行うことで、より正確な血小板の評価が可能となる。また、第1病日のドットプロットでは、極少数の血小板プロットが認められるものの、プロサイトDxによる血小板数が0/ $\mu$ であった。これは、血中血小板数が500/ $\mu$ 以下になった場合に認められる現象であり、必ず

しも血小板数が0/ $\mu$ となっているわけではない。この場合、血液塗抹による大型血小板や血小板凝集塊の有無を確認すると共に、血小板概算数の評価が必要となる。